

# キャリア教育をテーマとした問題解決能力の育成

光永 文彦

実践女子学園社会情報教育イノベーション研究所  
mitsunaga-fumihiko@jissen.ac.jp

## < あらまし >

本発表は、共通教科「情報」の目標の1つである問題解決能力の育成と全校的なキャリア教育を念頭に2006年度より「情報A」(2013年度より「社会と情報」)の授業で探求型プログラムを導入した事例発表である。その中で2011年度の実践について事前、事後にアンケートを実施し、その授業効果を検討した。

## 1. はじめに

高等学校新学習指導要領(文部科学省2010)では「生きる力を育む」ことがうたわれ、各教科とも課題解決的な学習や探究活動へと発展させることが求められている。情報科においても「課題を踏まえ、高校生の発達の段階や多様な実態に応じて、情報化の進む社会に積極的に参画することができる能力・態度をはぐくむ」こと、「コミュニケーション能力や情報の創造力・発信力等を養う」ことが重視され、「情報や情報手段を適切に活用して高い付加価値を創造することができる人材の育成」を求めている。

また一方で、中等教育の現場ではキャリア教育の重要性が叫ばれ、「一人一人の社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度」(文部科学省2011)の育成が重要視されている。しかしその内容は曖昧な表現が多く、結局のところ普通科では目先の大学受験に焦点が向けられ、専門学科・総合学科では職業教育に充てられているケースを散見する。諸富(2007)は「中学校から高校にかけては、内省による夢づくりモデル、および、キャリア疑似体験モデルに重点を移していくべきである」と指摘しているが、生徒達にとって理解しやすい存在はほとんどが専門職であり、現在の日本の職業選択で最も多い所謂一般職に注目し、その企業風土や職業観を感じる機会は限りなく少ない。

そこで実際の企業活動の課題解決を通して社会的自立を促し、高校生が既存の情報を踏まえて議論を重ねることで新しい価値を創造し、前述の能力を育成できるのではないかと考え、情報科教育、キャリア教育の目標達成を目的に授業設計し、探究型プログラムを実践した。

## 2. 探求型プログラム

実践に用いた企業探求プログラム(教育と探究社)は、実在する企業でのインターンシップを教室で体験しながら、働くことの意義や企業活動への理解を深めるプログラムである。インターンとして企業活動に参加し、準備となる研修や業務を経てミッションに取り組み、最後にチームでプレゼンテーションを行う。自発的に考え、行動し、結果に至るプロセスの中で、課題発見・解決力をはじめ、実社会で生きていくために役立つ様々な力を磨いていくことを目的とし、具体的に4つに大別される。

- SECTION 1 活動の準備をする
- SECTION 2 会社の仕事をする
- SECTION 3 ミッションに取り組む
- SECTION 4 プレゼンテーションをする

なお、2011年度は「クレディセゾン」「スカパーJSAT」「大和ハウス」「テーブルマーク」「日本経済新聞社」「森永製菓」の6企業においてインターンの募集がなされた。

## 3. 授業実践

### 3.1 実施概要

2006年より実践女子学園高等学校1年生「情報A」(週2時間、2013年度以降「社会と情報」)全7～8クラスを対象に、単元「情報を活用するための工夫と情報機器」「情報の収集・発信と情報機器の活用」「情報の統合的な処理とコンピュータの活用」の授業内容について、4月～10月の24～28時間で実施し、アンケートはその中の1クラス女子41名に対して行った。

### 3.2 授業概要

授業は1クラスにつき情報科教員1名、助手1名で実施し、基本的なスキルを提示するときのみ授業を行い、それ以外の実習については各チームの支援者の役割を負った。また仕事やミッション、プレゼンテーションの時間を中心に2～4名の企業人が参加し、ともに生徒の自発的な発想を全く否定しない形で進めた。



Fig.1ブレインストーミング作業

### 3.3 評価

経済産業省「社会人基礎力」、文部科学省「職業的(進路)発達にかかわる諸能力(4領域・8能力)」等を参考に独自に作成された「コーポレートアクセスコースの学習目標一覧」(田澤・宮地2013)を用いて、コミットメント力、課題認識・理解力、情報収集・活用力、課題処理・遂行力、コミュニケーション力、プレゼンテーション力の6項目について評価を行った。これは6件法のモデルであり、原則として数値が高い方がポジティブな意見である。

### 4. 結果

事前と事後の個人アンケートで、特に上昇した項目を列挙する。(上昇平均±S.D.)

- 「自分たちの生活と企業がどのように関わっているかに興味を持っている」(0.415 ± 1.209)  
(コミットメント力)
- 「プレゼンテーションをする際に、十分に事前の準備をしてのぞむことができる」(0.463 ± 1.270)
- 「プレゼンテーションの冒頭で聞き手の心をつかむような工夫をすることができる」(0.390 ± 1.033)  
(プレゼンテーション力)

逆にこれ以外の項目については、ほとんど変化がない、もしくは上昇と下降の両方が混在する項目が多く、明らかな有意差はなかった。また、1ポイント以上下降した項目もなかった。

### 5. 考察・結論・課題

結果より、上記項目について効果が上がったことが確認され、探究型プログラムが前述の目標に対して一定の効果があることが確認された。一方で、課題認識・理解力、情報収集・活用力、課題処理・遂行力については変化が見られず、自信を持って他者に表現することや実行していくことを全体で共有するまでには至らなかった。ただし、個人レベルでは2ポイント以上の上昇をみせた生徒もおり、教師の支援による部分が大きいと感じている。今後は個人分析や過年度の変化をみつつ、学校種差や男女差についても考えていきたい。

### 引用文献・参考文献

- 田澤実・宮地勘司(2013) 探求型の学習プログラムが中高生のキャリア意識に与える影響, 法政大学キャリアデザイン学部紀要, 10, 177-189
- 諸富祥彦(2007)「7つの力」を育てるキャリア教育—小学校から中学・高校まで—, 図書文化社
- 文部科学省(2010) 高等学校学習指導要領解説情報編, 開隆堂出版
- 文部科学省(2011) 高等学校キャリア教育の手引き, 開隆堂出版